
とある囚人の能力吸収（アビリティドレイン）

mikky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある囚人の能力吸収
アビリティトレイン

【コード】

N59160

【作者名】

m i k k y

【あらすじ】

東京都西部、ひとつ巨大な都市がある。人口230万人その八割は学生ということから「学園都市」と呼ばれている。その中にお嬢様しか通えない

「常盤台中学」がある。また学園都市の外れにある凶悪犯罪者しか居ない

牢獄がある。この物語は、脱獄した少年と常盤台の少女の話、囚人と学生が交錯する時、物語は始まる。

1話 能力吸収(アビリティドレイン)(前書き)

初めてで下手ですが、見てください。

1話 能力吸収（アビリティドレイン）

ここは常盤台中学から離れた牢獄、ここに一人の少年が収容された。

「探盗さいとう 狂也きやうや」年は14歳、

なぜ、彼が収容されたのかと言うと彼は他の能力者から能力奪い取り使用する能力を使うことができる。

「アビリティドレイン能力吸収」を使い、犯罪を犯したからである。

「ここからだせつ」狂也は檻を叩いている。

「うるさいぞ、だまれ」

「早くここから、俺を出せ」

警備員は、困った顔をしていた。

次の日の朝・・・

警備員は焦った、狂也が倒れていた。

警備員は「芝居だろ」と無視しようとしたその時！

「うあああああ」大声で狂也が唸った。

警備員は、迷わず牢の鍵を開けてしまった・・・その瞬間！

「ぐはぁ」「警備員が倒れた。」

「ちよろいな」「狂也は警備員を蹴飛ばし牢から出て行った。」

この事件は、常盤台中学にも知れわたった・・・

1話 能力吸収(アビリティドレイン)(後書き)

これからがんばるのでよろしくお願いします。

2話 電撃使い(エレクトロマスター)(前書き)

2話目です、自分でもおかしいと思います。

2話 電撃使い（エレクトロマスター）

「まてー、あたしと勝負しなさい」

「そんなもん出してたら、止まれねーよ」

「だったら今ここで、勝負しなさいよ」

「何でしなきゃいけないーんだあー」

少女「御坂^{みさか} 美琴^{みこと}」が電を放ちながら少年「上条^{かみじょう} 当麻^{とうま}」
を追いかけている。

当麻たちは今、とある川原を走っている途中であった。

いつもどおり美琴が当麻に戦いをさせようとしていた。

しかし、今日は違った・・・

「ゴゴゴオ」川原から数メートル離れた所にあった15階建てからの廃ビルが内部から爆発し崩れ去った。

当麻はその隙に逃げ、しょうがないので美琴はビルのあった場所に向かった、

「お姉様ー」

「黒子？」

ビルに着いた美琴が声のする方向へ振り向くと、美琴と同じ常盤台の制服を着た

「ジャッジメント風紀委員」所属の、「しめい白井 くろこ黒子」だった。

お互い、崩れたビルに誰か下敷きになってないか調べに来たのだっ
た。

だが彼女たちはまだ知らない、この後に起こることを……

2話 電撃使い（エレクトロマスター）（後書き）

次は、狂也と美琴が出会う話です。

3話 空間移動(テレポート)(前書き)

ネタが無い……

3話 空間移動（テレポート）

美琴たちは怪我人が居ないかどうか調べていた。

「そついえばお姉様なんでここにいらつしやるんですか？」

「いや・・近くを歩いていたらものすごい音がしたから、それより黒子こそ何でここに居んの」

「上の方から連絡が入りましたの、それとこちら辺に牢獄から逃げた者が居るといふ情報が二日前からありましたの」

「ふーん・・あつ誰か居る」人影らしきものが動いた。

美琴がそう言うのと人影の方から炎の玉が飛んできた。

「危ない！！」と、黒子が叫んで御坂と一緒にテレポートした、二人はビルを支えていた柱の裏に隠れた。

今度は水が美琴たちを襲った、黒子は驚いたが美琴は違った、ここぞとばかりに身構えている

美琴の右手から電撃が放たれた、人影は美琴を指差すように人差し指を前に出した。

すると、指先から電撃が吸収されていく。

「どつどつして電撃が・・・」

「ありがたく貰っておく」そついい残し人影は消えた。

3話 空間移動（テレポート）（後書き）

期待はずれだと思います。

それと中間テストがあるので少しの間休みます。

4話 能力を吸収する能力（前書き）

長々と待たせてしまつてすみませんでした。
狂也についての話です。

4話 能力を吸収する能力

黒子は今、彼女の所属している「第177支部」に戻った。

そのころ美琴は、近くに隠れていた当麻を見つけ追いかけていつてしまった。

「で・・・何かわかりましたか『初春』」

「ちょっとまってくださいね、今情報を割り出していますから」

第177支部の一角で少女「初春^{ついはる} 飾利^{かざり}」がパソコンに向かい、何かを調べている。

「出ました・・・御坂さんが見たという、いくつも能力を操る人物は一人だけいます。」

初春は続けた、

「『探盗 狂也』年齢14、身元不明、所属不明、能力は「能力吸収」つい、この前、牢獄を脱獄した人物です。」

「能力吸収・・・聞いたことの無い能力ですわね。」

黒子は腕を組みながら、つぶやいた。
それに対して初春は、

「実際私たちもよく分かっていない能力なんです、大部分は能力者の放った能力を吸収することによってそれを自分の能力として使用することしか分かっています。」

「能力の吸収・・・そんなことが出来るのか、と言いたいところですよわ。」

黒子がそう言った瞬間初春が黒子の方を向いて早口で言った。

「事件発生です、場所は・・・崩壊したビル約2km離れた川原です！」

「わかりましたわ。」

黒子は通信機を置いて出て行ってしまった。

しかし黒子は通信機を置いていったことを後悔することになる。

4話 能力を吸収する能力（後書き）

今度は黒子と狂也をぶつけてみたいと思います。

5話 囚人とジャックジメント（前書き）

美琴と佐天が都市伝説、狂也と黒子がバトルの話です。

5話 囚人とジャツジメント

黒子が177支部を出たころ美琴は当麻を追っていたが、見失ってしまいい途方にくれていた、

しばらく歩いている内に初春のクラスメートの少女「佐天 涙子」とコンビニで鉢あわせをして、近くにあったベンチに座りジュースを飲んでいる。

もちろん美琴が飲んでいるのは「ヤシの実サイダー」である。

「そっついえば佐天さん、なんでコンビニにいたの？」

「そ・れ・は、コレを探してたんですよ！」

美琴が聞くと涙子は手にしていたコンビニ袋に手を入れてあるものを取り出した。

「ジャジャーン『都市伝説チョコ』」

「何そのチョコは」

「えっ知らないんですか今はやっている都市伝説すべて集めた最高のチョコを！」

涙子が美琴に迫りながら説明をして、そのチョコの包み紙をあけ中のカード(?)らしきものを取り出し読み始めた。

「えーと、なになに・・・見た目は中学生なのに多重能力を使う殺し屋。」

「多重能力なんてありえないわよ」

美琴がそう言うと、涙子は次のチョコをあけ始めた。

「次は・・・どんな能力も吸収してしまう能力を持つ脱獄をした中学生。」

「えっ・・・」

「どうしたんですか、御坂さん？」

「なっなんでもないわよ、あはははあ」

美琴は、この前のことを思い出してため息をついた。

一方、黒子はどうと・・・

「ジャツジメントですの」

そこは川原から少し離れた路地裏で周りの壁は何かでえぐったような跡があり男が二人倒れていて近くに立っていた狂也が黒子の方を睨み付けてきた。

黒子は一瞬体が震えたが頭を横に振り少年に向かって叫んだ。

「一般人への暴行、器物損害の容疑で貴方を捕まえますわ。」

狂也は冷静な顔で呟いた。

「俺にはやらないといけない事があるから、今つかまるわけにはいかない。」

「そう、おっしゃられても罪は罪です償ってもらわないと困りますわ。」

黒子が太ももに隠してある釘のような物を手にして身構えた。

「俺はあまり戦うことが好きではないんだが・・・そんなこと言っ
てられないか」

狂也が話している途中から黒子が釘のような物を飛ばしてきた、狂也は幾つかは避けたが後ろからテレポートしてきた2本を回避しきれずに左の二の腕の部分に刺さった。

「グッ」と声に出して、その場に膝をついた。

「これ以上暴れないなら、手は出しませんわよ。」

「いったらう、俺にはやらないといけないことがあると・・・」

「ではしょうがないですが、気絶してもら「俺の能力を教えてやる

よ」

突然、狂也が黒子の話をさえぎって続けた。

「一つ目は能力者の放った能力を自分のものとして使える。」

「調べ済みですわ。」

「二つ目は能力の影響を受けた物に触れることで・・・」

その瞬間、黒子の前から狂也の姿はなく気づくころには黒子の後ろにいた。

「その能力を自分の物として使える。」

黒子は首の裏に手刀を打たれて倒れていく。

黒子は今更のように通信機を持たずに来たことを後悔した。

最後に「すまない」という狂也の声がかすかに聞こえた。

5話 囚人とジャッジメント（後書き）

なんだか狂也が強くなりすぎてるような・・・
「とある殺し屋の多重能力」の主人公も都市伝説として出しました。

6話 幻想殺し(イマジンブレイカー)(前書き)

すみません、遅れました。

6話 幻想殺し（イマジンプレイカー）

黒子が倒れてから数分後、アンチスキルと一緒に初春も事件の現場にやってきた。

「白井さんっ 白井さんっ しっかりしてくださいよ！」

「うっ」

「気がついたんですか」

「初春・・・どうしてここに？」

黒子は首の裏を押さえながら起き上がった。

「白井さん、動いちゃだめですよ」

「何言ってるんですの、早く犯人を追わないと」

初春は立ち上がるうとする黒子をなんとか止めようとする、しかし突然黒子はその場に膝をついた。

黒子はこのごろ自分の時間を削ってまでジャッジメントの仕事をしてきた、黒子は不本意だが病院へ行くことにした。

そのころ、狂也は・・・

黒子から吸収したテレポートで路地裏から離れていた

「人目のつかない所を探して、傷の手当か。」

狂也は左の二の腕の傷を押さえながら移動していた、しばらくして公園の茂みに隠れて傷をふさいで休んでいると「不幸だっー」と誰かの叫びが聞こえた、狂也は無視をしようとしたが狂也の近くに財布を加えた犬が走ってきた、犬は狂也の前で財布を置いて逃げてしまった。

仕方ないので、財布を持って茂みを出ると膝を地面につき両手で頭を抱えている当麻がいた。

「あーついに、やってしまったーこれから俺はどうすればいいんだー」

叫んでいる当麻に近ずき、声をかけた。狂也自身やりにくいと思っただがキヤラを作った。

「コレあなたのですか？」

「それは・・・捜し求めていた財布だ」

「よかったですね。」

これで、去るつもりだったが・・・

「やっと見つけたわよ。」

当麻の後ろに頭から青白い電気を放っている美琴がいた。次の瞬間、美琴は狂也のことなど気にせず電撃を放ってきた。

「うわっ危ねえだろうが。」

当麻は右手を前に突きだし「ピキーン」と電撃を打ち消してしまっ
た、

『なんだ、この能力は？』狂也は心の中でつぶやいた。

しかしこのことは予想していて再び威力を上げて当麻達に電撃を撃
つてきた。今度は連続で撃ってきたのですがの当麻も打ち消そう
とはせず一目散に逃げていく。なぜか狂也も一緒に逃げなければな
らない状況だった・・・

数分後・・・

二人は、なんとか美琴を撒いてきたようだ。

「はあ はあ、何なんですか彼女は？」

「はあ はあ、ビリビリのことか」

「はあー、そのビリビリは何でこんなことするんですか」

「何も知らないんだな、これが」

そして、当麻はもう一度狂也に礼を言ってから二人は当麻の住んで
る寮で分かれた。

6話 幻想殺し(イマジンプレイカー)(後書き)

物語を次から、大きく動かそうと思います。

7話 100%の能力吸収(前書き)

あけましておめでとうございます。今年も「とある囚人の能力吸収」をよろしく願います。

7話 100%の能力吸収

狂也は、学園都市から出てとある研究施設に向かった。そこには狂也の「能力吸収」を研究している「高坂こうさか 七海ななみ」が住んでいる。

「研究のほうはどうだ？」

「あら、狂也来たの」

年上「年齢は十八歳」にため口を使う狂也を気にせず、七海はパソコンに向かって作業をしている。もちろん内容は「能力吸収」についてである。

「レベル3でも五つまで能力を吸収できるし、吸収した能力の6割を引き出すことが出来る・・・そのままでも強いんじゃない？」

「それでもあの男には勝てない」

「まあ、そう言うとおもったわ」

七海は、パソコンのとあるファイルを開いてENTERキーを押した。するとパソコンの隣にあったサーバーのような機械が開き中からUSBメモリーが出てきた。

「『能力吸収』用の能力体結晶よ、あなたのDNAをベースに作ったわ。もちろん暴走する確率の方が高いけどそれでも使う？」

「当たり前だ、そのためにお前に研究させている」

「はいはい分かってるわよ・・・けどピチピチの十八歳にため口はよくないと思わな〜い」

「冗談はやめろ、お前の命盗る（とる）ぞ」

彼女はその場の空気を壊す「状況混乱ムードストライク」という能力を操る。（本

当にすみません)

狂也は無視してUSBメモリーのボタンを押す。すると「アビリテ
イドレイン・レベル5」と音声 flowed。

「いよいよね」

「ああ」

研究所入り口。

「ここにあの方の弟がいるのかよ」

身長180cm位の男が立っている、男は鉄で出来た扉に触れたす
ると扉は柔らかくなった。男はそのまま扉を押して研究所に入った。

「やわいのかよ」

男は、狂也達がいる方へ歩いてゆく。

「グハアアア」

「狂也っ」

狂也は地面に手と膝をつき唸っている、七海は何も出来ずただ見守っていることしか出来ない。

「ハア・・・ハア・・・」

「大丈夫、狂也」

「・・・成功だ・・・」

狂也はゆっくり腕に刺さったUSBメモリーを抜き、立ち上がった。

「力試しに誰の命盗ってやろうか」

そして、二人がいる部屋の扉が壊れる音がした。

7話 100%の能力吸収(後書き)

七海さんって・・・

8話 少年の実力

狂也は、壊れた扉の方を向いた。

「・・・良い実験台がやってきたな」

「誰が実験台だよ」

部屋に入ってきた男は両手に鉄の棒を持っている。

「お前、誰だ？」

「俺はお前の兄、信也様しんやによって作られた人間だよ」

「信也だと・・・」

狂也はそれを聞いて拳を握り、男に向かって走ってゆく。男は狂也のパンチを受け流し鳩尾に蹴りを入れようとしたがテレポートで避けられた。

「信也の場所を教えろ」

「それはできないんだよ」

「だったらお前の命を盗ってやる」

狂也は右手に電撃、左手に炎を纏った。

「もう一度言う、信也の場所を教えろ」

「無理だよ」

男がそう答えた瞬間狂也はテレポートで間合いに入り込み右手でパンチを打ち込んだ。しかし男はパンチを鉄の盾のようなもので防いだ。

「あまかつたんだよ」

「・・・なんだその能力」

「スチールコート鋼鉄加工、鉄の形状と純度を身体に触れている間だけ操ることが出来るんだよ」

「だったらお前の能力盗るぜ」

そう言うと盾から能力が吸い取られるように元の棒状に戻った。狂也はその隙に炎を纏った左手で男にパンチを打ち込んだ。

「グハア」

男は殴られ火傷した腹を押さえ気絶した。そして狂也達はその場から離れ学園都市に向かって七海の運転する車に乗っている。

「狂也、今更学園都市に何かがあるの」

「ちょっと情報収集をするために」

「何の情報について？」

「信也についてだ」

そんな話をしている最中に学園都市の入り口に着いた。

9話 「一方通行(アクセラレータ)」の日常(前書き)

題名どおり『あの人物』を書いてみました。

9話 「一方通行(アクセラレータ)」の日常

とあるビルから人影が二つ出てきた、白髪の少年とアホ毛の少女である夕暮れ時のコンビニに向かっている。

「ミサカはミサカは、お腹が減ったので何か買ってよ。って顔を覗きこんでおねだりしてみたり〜」

「アンツ、しょうがねエな買ってやんよ」

「やったーってミサカはミサカは喜んでみたり」

アホ毛の少女「打ち止め(ラストオーダー)」はコンビニに入るなりお菓子売り場に走っていった。

白髪の少年「一方通行」^{アクセラレータ}は飲み物の方へ行き、コーヒーを4本籠に入れた。

結局ラストオーダーが持ってきたクッキーと籠に入れたコーヒーを買いコンビニを後にした。

「さつさと黄泉川ンところへ戻るぞ」

「は〜いってミサカはミサカは声を出して返事をしてみたり」

「ハッ、ご機嫌なアガキだ」

今更だがアクセラレータは杖をついている、夏休みの最後の日8月31日に脳にダメージを負って演算機能と言語機能が出来ない状態だったが、ミサカネットワークを使用して今ではここまで回復している。

「はア、帰ったらメシ食って寝るか」

「ヨミカワの煮込みハンバーグは絶品なのだ、ってミサカはミサカは本日の夕飯を願掛けしてみたり」

「アイツ地力がねエから煮込ンでごまかしているだけじゃねエの？」

黄泉川の話をしながらビルに戻っていった。

この後起こることアクセラレータは考えもしなかった。

9話 「一方通行（アクセラレータ）」の日常（後書き）

間違いや、俺の嫁はこんなじゃないなどの感想がありましたらください

一方通行「だアレだ、クソガキを『俺の嫁』とか言ってる野郎は、そんな言葉喋れなくしてやるオカ」

・・・なんだか怒っているようなのでこちら辺でおいとまします、
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5916o/>

とある囚人の能力吸収（アビリティドレイン）

2011年10月8日03時52分発行